

Culture



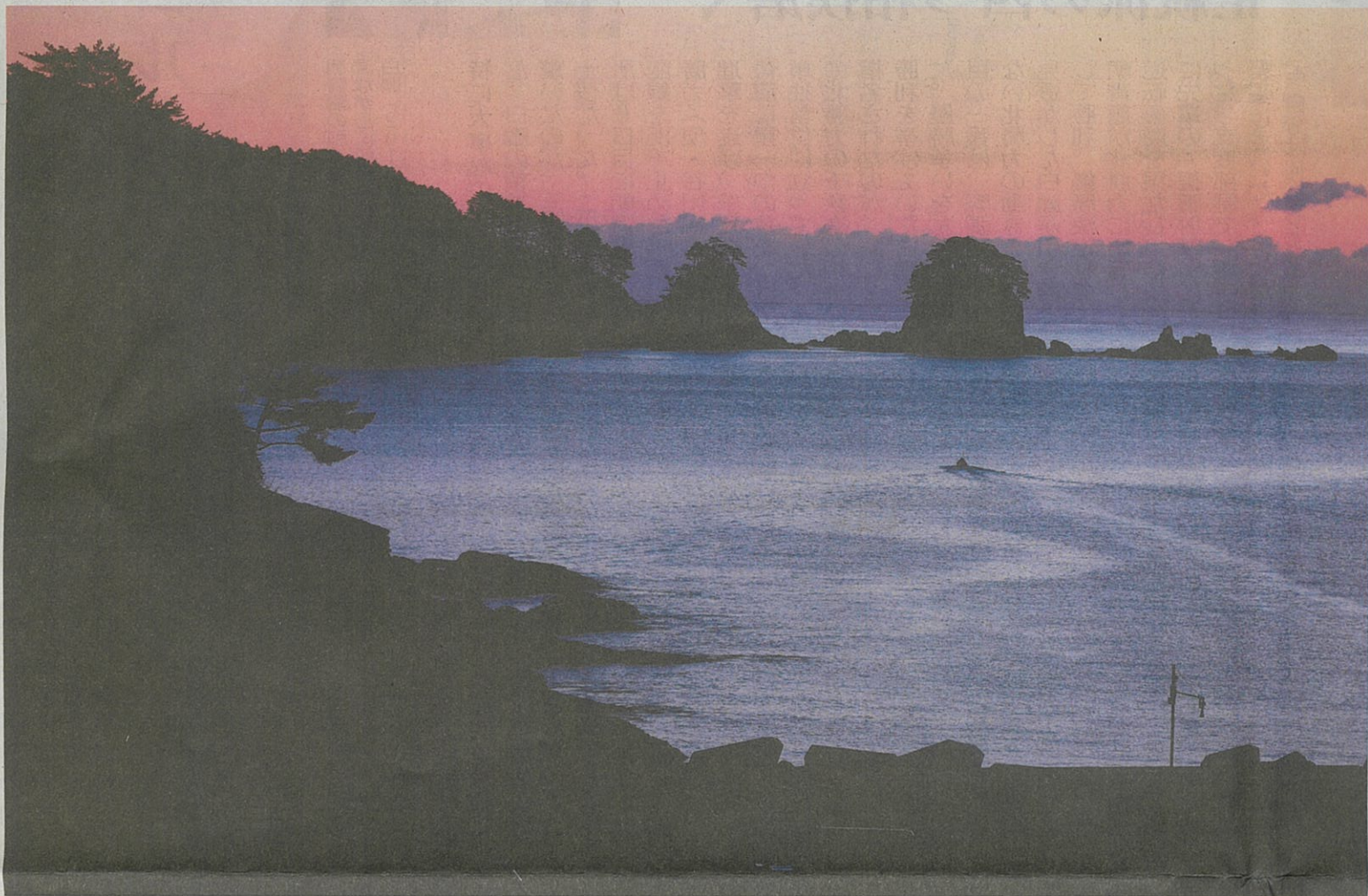
2011年の東日本大震災の石碑（手前の2基）、1933年の昭和三陸津波の石碑（左奥）、1896年の明治三陸津波の石碑（右奥）

羅賀ふれあい公園の津

※ 岩手県田野畑村



津波の惨禍 風化させぬ気概



静寂に包まれる早朝の田野畑村羅賀地区。過去幾度もの津波に襲われた—永井秀典撮影

被災刻む碑 データベース化

国立民族学博物館の日高真吾教授（保存科学）によると、明治や昭和の三陸津波の際に建てられた石碑は集落の中心にあることが多く、「多くの人の目に触れ、繰り返し津波に襲われた地域に警鐘を鳴らす役割を果たしてきた」と話す。硬い石にあえて文字を刻んだ津波碑は「先人の力強いメッセー

ジが伝わる記録媒体として、史料価値が高い」と強調する。

一方で、東日本大震災の際、地域によってはこうした石碑の意義が薄れていた。「新たな住民が増え、津波の記憶が風化している地域も多い。石碑に込められた先人の思いが忘れられるのはもったいない」。同館では「津波災

害にかかわる文化遺産の情報の集積庫」として、地震や津波災害の記憶を伝える寺社の伝承や石碑の文面を紹介する「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社・石碑データベース—」（<http://sekihi.minpaku.ac.jp/>）を公開。13道府県約480件の情報を掲載している。

日高教授は岩手県釜石市で津波で傷んだ碑を修復し、実物大の碑のレプリカを作成して地元の資料館に寄贈する取り組みなども進める。「現代の社会で碑の記憶を受け継ぐための効果的な方法を今後も考えたい」

あの巨を忘れず、この地で生きる——。田野畑の人たちの思いに触れた気がした。（多可政史）

※日本各